

福島を語り、福島を聞く 言葉の力で福島と世界をつなぐ



Ryouchi Wagou PROFILE

1968年福島市生まれ。詩人。高校の国語教師。第1詩集「AFTER」(1999年)で第4回中原中也賞を、第4詩集「地球頭脳詩篇」で第47回土井晩翠賞を受賞(2006年)するなど、現代詩の旗手として活躍しているほか、言葉を通じた街づくり活動などを展開。2007年には、福島市制100周年記念讃歌の作詞も手掛けた。近著に、本年3月16日の最初の詩作から5月25日の「決着の詩」までツイッターに発表した詩を全文掲載した「詩の魂」、続編として福島で眠る魂を「悼む」ために紡いだ「詩ノ黙礼」、被災者との対話から生み出された新たな詩の言葉を書き下ろした「詩の邂逅」がある。

せきを切ったようにあふれ出る 魂の言葉をツイッターで発信

「ツイッターを始めたのは、とにかく生きた証しを残したいと思ったことがきっかけでした」。3・11を境に、それまで自分の中にあつた「絶対」が音を立てて崩れていくのを感じたという和合さん。同時にこれまでやってきたことや自分自身までもが奪われてしまったような気持ちになったそうです。計り知れないダメージ。自分自身に対する誇りまでが奪われ、余震におびえながら小

さくなっていく自分。そんな時、脳裏に浮かんだのがツイッターでした。

「読まなくてもいい。夜空に向かって叫ぶような気持ちで書き始めました」。せきを切ったようにあふれてくる魂の言葉は、瞬く間に多くの読者の心をわしづかみに。そして、リアルタイムで世界中から届くメッセージが、和合さんの力となりました。「むさぼるように読みながら書き、書くことで自分自身があきらめられない」とか「絶対に生きる」などのメッセージになりました」



詩人
わごう りょういち
和合 亮一さん

福島の人は何を感じ何を語るか 世界中の人が待っている

今年6月、絶望と希望の間を揺れながら書き続けた作品が、詩集「詩の魂」などとして刊行。他にも国内外のイベントでの詩の朗読や、8月には福島ゆかりの音楽家など有志と共に「プロジェクトFUKUSHIMA!」を開催するなど、精力的に活動されています。

震災後の活動で、和合さんは「語る」と「聞く」の大切さが見えてきたと言います。「オランダで大震災追悼コンサートに出席した時確信しました。世界中が、福島の人たちが何を語り何を話すのか注目しています」。特に放射能の問題は、社会全体の問題。そこに、「どう、言葉が突き刺さっていくか。福島を語り、福島を聞くことは、先の見えない扉を開く鍵を見つけるヒントになる」とも。

震災から半年。言葉を失った被災者の分まで思いを書き続けてきた詩人、和合さん。「これからです。ここから始まる。発信を続けながら、震災後の福島の文化を作っていくのです」。その最前線に、今私たちは共に立っています。



▲▼8月7日に開催された「第33回ふくしま花火大会」で、この日のために書き下ろした詩「追悼」を朗読



▲「プロジェクトFUKUSHIMA!」を前に和合さんが主宰した「詩の学校」。詩作を前に参加者がそれぞれの思いを語り合い、用紙に書き込んでいく



▲▼「詩の学校」で紡ぎ出した連詩を、8月15日に開催された「プロジェクトFUKUSHIMA!」で披露。会場となった「四季の里」に全国から多くの人が集まった